

## VI. D 冥界

冥界の念入りな描写 = 『オデュッセイア』 11 巻(と 24 巻)、アリストパネスの『蛙』、  
ウェルギリウスの『アエネイス』 6 巻、プラトンの『国家』 10 巻  
どこにあるのか？ 使者はどうしているのか？

### (1) ありか

下方 —— 『オデュッセイア』 10. 174、『イリアス』 6. 19 など（「下る」「地下」など）

西方 —— 『オデュッセイア』 24：太陽の門を超えたところ

無(?) —— プラトン『ソクラテスの弁明』

水域の向こう側(?)

### (2) 境界

オケアノス(海流)

アケロン(川) —— カロンという渡し守にオボロス銭を支払う (Aristoph. 『蛙』)

ステュクス(川) —— 神々の誓いにも用いられる水の流れる特別に神聖な川 (Pl. 『国家』, Ap. 177)

レーテー —— 水流か、野原か、館か椅子か

☆境界越えを儀礼で代用できる？ (『オデュッセイア』 11 巻)

### (3) 死者の意識

活力・意識なき亡者たち (Odys. 11 ほか) → 血を飲むまで母が息子のこともわからない。

しかし、一旦意識を取り戻すと、かつて  
生きていた時の個性や表情を持ち続けている。  
あるいは、冥界にいる者どうしは普通に対話している。

コウモリのごときもの (Odys. 24) → チチ、チチと啼き声をあげて群れながら進む。

杖でヘルメスによって追い立てられる。

眠り → 「全てを眠らせるハデスが私をアケロンの岸边へ連れてゆく」 (Soph. 『アンティゴネ』 810)

忘却 → 「忘却と沈黙は死者たちの特権である」 (『ギリシア詩華集』 8. 236)

(cf. Apollod. 177 末 3 - 178 ペイクトオスの椅子)

続く知覚(?) → 眼が見えたら、私はハデスへ行ってどのような目で父を見、惨めな母を見れば  
よいかわからぬではないか (Soph. 『オイディプス王』 1371-73)

#### (4) 責苦と至福？

ミノス王と弟ラダマンテウスが裁判官を務める (Apollod. 120. 8-10)

刑罰 —— cf. Bulf. 246 末 6 - 247. 8

浄福 —— エリュシオン (Apollod. 202. 9)

「浄福者の島々」……カドモス、ペレウス、アキレウスなど

どちらでもない —— Odys. 9 巻の大半の死者

- ・まとまったイメージはほとんど作ることができない
- ・生者と死者を隔てる境界 —— 空間的なものと知覚的なものと。交換可能(!?)
- ・空間的な隔たりは水流による